

劉子健著

歐陽修的治學與從政

斯波義信

宋代の史家、古文復興運動の推進者としては周知の歐陽修を、新たに政治史、學術思想史の経歴について全面的に再評価し、北宋盛期の集権官僚制とその支配理念の形成過程の脈絡に試掘を加えようとする——それが本書の究極の意図であると、私は理解する。

さて、かかる問題の展開に当つては、当然、それ自体身分的政治的に、主観的な制約を負う断片資料から、いかにして歴史的に客観的に、公正な真理を還元推論するかという、素材処理上の問題があり、よし史料の科学的処理がこの困難を解決したとしても、本来的に同一人格が、政治家、學者、道德家と多方面に活動し、しかも公的政治理念も、私的倫理関係も、未分化に一体化しているという、過去の儒教的処世や修養の特異な在り方を、いかにして全構造的にとらえ、いかなる学問視野のペースペクティヴにおいてその歴史因果を説明するかという、統整法上の懸案未解決な問題が存在する。これに対して、従来、學術史、政治思想史、社会構成史の諸分野における研究発達の過程で、すでに諸多の説明仮説が妥当性を証明されつつあるが、所詮現状では、全体的関聯を推論し尽せる程に、充実しているとは必ずしもいえないようである。問題解明のために、研究者自ら解決を迫られる主體的、客体的条件の困難さは、今後におい

てもなお容易ではないといえようが、さてそれでは、かかる学問状況の下に、本書はいかなる素材処理に立ち、いかなる接近法において問題に迫ろうとするのか。さし当つて著者および内容の紹介から始めて行きたい。

スタンフォード大学教授(前ヒッツバー)劉子健氏は、燕京大学の出身で、すでに二十数年来の研究歴を有する在米の中国史家である。専攻は范仲淹、梅堯臣、王安石らをめぐる北宋盛期の政治思想史の研究にあり、在パリ Sung Project のメンバーである。教授の学問傾向は、基本的にいえば、錢穆教授らの「国学」風の伝統學術思想史研究の系列に属するが、その外、蕭公權教授らの政治思想史のテクニク、在米楊聯陞教授、A. Wright 教授らのシノロジーのアプローチを継承し、しかもさらにわが国の諸橋、武内、西教授らの宋学研究、青山、周藤、宮崎、佐伯教授らの政治史、社会構成史研究の最新の成果をも意欲的に自己の体系内に摂取するという、きわめて振幅の広い学問領域が教授の特色である。主著の一つである Reform in Sung China: Wang An-shih and his New Policies, 1959 は、そのような広い学問的素養の上に立つて、中国、日本の既往の研究の学説史を網羅的に整理した上、斬新な政治行動理論を導入しつつ、王安石新法と新旧両法党政争の政治力学的背景を動的に描出しようとしたものであった。この試みは、その諸仮説の導入と推論の仕方にやや性急さと唐突さを感じせしめるものがあつたが、しかし、楊聯陞教授の序言の言葉を藉りるまでもなく、学説の周到なる検討と、可能な問題点の抽出によつて、旧来の

型を破つた新しい研究を発芽させ、発展させる基礎作業は一応果されたのであり、中文、日文、欧文のいずれにも習熟して言語的研究障害を感じず、しかも伝統思想に好意的ながら、一応自己疎外した批判的立場に立ち得る劉教授の研究が、米国の土壤にあつて今後どのように展開するか、われわれの寄せる期待と関心は少なからざるものがある。

さて本書の構成を目次に従つて示せば左の如くである。

引言

上編 歐陽修の學術と思想 (一) 歐陽の經学 (二) 歐陽の史学 (三) 歐陽の行政理論 (四) 歐陽の文学 (五) 歐陽の信仰問題

下編 歐陽修と北宋中期官僚政治的糾紛 (一) 歐陽的政治経歴 (二) 歐陽の発跡 (三) 范吕党争和解 (四) 慶曆改革的由来 (五) 慶曆改革及其失敗 (六) 朋党与言官 (七) 歐陽中年蹉跎与継統闘争 (八) 歐陽与韓富当政—嘉祐治平之治 (九) 被誣外任、反新法、与退休

引言

北宋盛期(仁宗—神宗年代)を官僚政治、伝統學術における、中国史上の一大転換期とする過渡期の歴史認識を基本観点として、盛期の代表人物として歐陽修を選択することの正当性を力説し、次いで在来の過少評価に対するアポロジとして、評価不足の理由四(業績の多様、先駆性、学派の不成立、正統宋学系譜からの離脱。新法への寄与の不当評価)を挙げ、零細資料の復原作業に基く再評価の必要性を説く。

上編 歐陽修の學術と思想

(一) 歐陽修の經学

一般に春秋派、正名を主張する歴史派の代表と目される歐陽修を再評価し、伝統學術であり、古典学たる經学に対する彼の解釈論上の立場を検討する。宋代の經学の趨勢は、唐—宋初の漢学における客観一元的解釈(訓詁、師承重視)の停滞性・權威主義、に対する批判的空氣の中から、宋学の先駆たる主観多元解釈の時代を生み出し、やがて宋学の天下國家観の一元解釈に帰一する。歐陽修はこの初期の学風變化の啓蒙主義の先驅をなすもので、慶曆変革の領導者胡瑗、孫復の影響下に、主知主義、合理批判主義を提唱し、その実践的根拠を實用主義的な実践道德、平易な現世規範の実現に置いた。彼は当然、讖諱説の不合理を排し、經典の自由直接的討議研究の道を開くが、解釈論上、六經全部を尊重しながらも、重点は易経、春秋、次いで周礼に在り、易経は主知主義の根拠として積極的に撰取し、春秋は三伝の間接理解を排して直接研究を提唱して、批判主義の拠り所とし、周礼に対しては懷疑批判の立場に立ちながら、行政上の実用効果を認めていた。つまり歐陽修の經学解釈論上の貢献は、宋初の啓蒙主義的な合理批判主義の先驅として主知的な自由討論の風潮を推進した点にあるという。

(二) 歐陽修の史学

經学上の合理批判主義は、当然、素材である古典の批判考証、文献学、史学の重視と関聯する。歐陽修は古史の記述を批判し、原史料の蒐集につとめ(集古録)、目錄学の業績(崇文総目)や、新唐書、

五代史の編纂、族譜の編纂、史料の保存（史官時代）、正統論はじめ倫理的理想主義史觀の提唱、によつて史學の発達に貢献した。

(四) 歐陽修の行政理論

歐陽修は慶曆變法、濮議における政争の渦中の人物であつたが、政治家として彼自身、特筆すべき行政理論を用意していた訳ではない。彼の政治主張は、伝統的な儒家的徳治主義、人格主義を主とし、刑罰主義、法治主義を従とする、一種の自然法主義的な理想主義であり、その裏づけとして、官吏の考績制度を重視し、官吏推薦制度においても、學術、品格、性情に嚴重な規範を要求した。彼は君主の信任を前提とした官僚の機能主義を唱えていたから、行政改革を主張したとしても、漸進的改良主義や、行政画一化の緩和にとどまり、權威や体制そのものに対する主張は持ち合せていなかったのである。

(四) 歐陽修の文学

歐陽修の文学史上の貢献を詞、詩、文についていえば、率直にいつて、詞は特筆すべき地位には置かれないが、五代以来の江西詞派の伝統を継承、民謡を吸収して新鮮味を加えた作風を広布した功績を評価すべきである。古詩においても、李商隱の西昆体を排し、自由な作風を提唱したが、一般にやや過大評価の嫌がある。

これに対して散文体における古文復興運動は、彼の文学的貢献の中でも最大のもので、大節、内容、修辭、深遠、を重視する文体改革理論を提唱した外、古文復興運動を政治の分野に拡大して徹底に つとめ、科挙制を策論重視に変革し、古文家の登用をはかり、文学

的、政治的變革の起動力となつた。

(四) 歐陽修の信仰

歐陽修の儒家的理知主義が、儒教以外の信仰問題においても、否定的態度をもつて臨んだことはけだし当然である。彼は民間信仰を排除したことはもとより、道教、仏教、とくに仏教に対しては強い否定の態度を示した。しかし彼の批判は、仏教のもたらした奢侈、(儒教的)風俗の破壊に間接に向けられたにすぎず、教理に対する直接理解はむしろ浅く、批判は常識的で、一面妥協的ですからあつた。彼は当時の儒家一般とひとしく、来世的な信仰問題に対する解答を儒教の体系内からひき出すことができなかったのである。

二

下編 歐陽修と北宋中期官僚政治の紛糾

(一) 歐陽修の政治経歴

本章以下は、歐陽修個人の修養より転じて、彼の政治的浮沈の中に、北宋中期における、既成の体制と革新的諸要素との對抗渦流の様相を動的に描出しようとする。

(二) 歐陽修の来歴

歐陽修は北宋中期に抬頭した江西官僚グループに属するが、家系上、進士として初めて栄達した父は外地の小官を歴任し、彼自身についても、官僚としての地縁意識はむしろ稀薄である。綿州で生まれ、早く父と死別した彼は、叔父に従つて隨州で成長し、漢陽の膏廬に学び、その推挙と姻籍で進士として官界に登場する。その後、西京推官時代、尹洙、梅聖俞、石延年らの知己を得て文才が開花

し、諫官范仲淹との合作も成り、後年の活動の萌芽が現れる。

③范仲淹、呂夷簡の党争と和解

次の学士院時代、宋初より次第に動搖の度を加えた宰相権に対する、諫官、翰林官ら天子周辺の官僚の攻撃が、天子の支持を争う党争に発展し、范仲淹一派の新興勢力は、経済上、官界進出上の利害を背景として、宰相権と争うため、官界に政論を武器とする刷新運動を展開しつつ、派閥を形成した。欧陽修は当然、范仲淹の有力な与党として、言論を以て政争の渦中に投じることが、結局、「朋党」の烙印を捺されて立場を失い、夷陵貶出という第一次の挫折に遭う。この失意時代、党争の限界と帰趨を自覚した彼は、学問探究に沈潜する一方、行政上の漸進改良主義への転向が生ずる。やがて西夏戦争を機会に范呂和解が表面上成立するが、欧陽修は大義名分の原則主義に立つてこの和解を是認しつつ、朋党形成には批判の態度を示し始める。

④慶曆改革の由来

西夏戦争後の政情不安の中から起つた慶曆改革は、一種の政界刷新運動であり、天子の支持を獲得した諫官一派の最初の、至高の勝利であった。呂夷簡は罷任され、韓琦・范仲淹が宰相に登用され、欧陽修、蔡襄らの新興派の諫官は、これを側面援助しつつ自らの地位を高める。

⑤慶曆改革とその失敗

王安石新法の先駆たる慶曆改革は、明黜陟、抑僥倖、精貢举、択長官、均公田、厚農桑、修武備、推恩信、重命令、減徭役の十綱領

を掲げた。しかしこの改革が僅か一二年で破綻し、激しい政争、内訌を生じた原因は何か。改革の成否をめぐる争点の第一は、蔭補制度の特権世襲の制限であり、特権を奪われる上層官僚は反対した。第二は科举制度の改革であり、官学制度を全国的に充実して教育界を統制整備するとともに、私学の教育理念を吸収して古文運動、復古運動を科举に反映させ、經学を積極的に經論に應用して、旧派の文人的教養の地盤に打撃を与えたのである。第三は官吏の考績制度、推薦制度の改革であり、儒家の人才主義の理想の徹底をはかつたといえるが、現実には反対派に「朋党形成」の口実を与える余地があつた。

それでは改革失敗の直接原因は何か。第一は政論と現実の遊離であり、第二は范仲淹の拙速、性急さであり、第三は改革派自身の党派性であり、第四は足並みの不揃いである。改革派は政敵から再び「朋党」を宣せられて天子の支持を失い、一挙にして失墜挫折する。

⑥朋党と諫官

慶曆改革の過程で朋党と諫官制が政治問題化する。すなわち政論自由の風潮下に派閥の形成は進むが、派閥が複数に分裂すれば、弾劾を封ずる手段として、「朋党」の名分に擬することによつて政敵の行動を掣肘する。しかし更に進めば、現状の合理化をねらつて朋党間の正邪争い、つまり政治倫理としての朋党の是非を論ずる議論が生ずる。このような議論を整理してみると、第一に党争を君子と小人の必然的対立に帰し、客観的判断を君主の明察に委ねる説、第

二に統一折衷の解消論、第三に小人の制圧を認める非観論、第四に小人の自滅を期待する樂觀論（歐陽修の君子真朋の予定説的な逆説的樂觀論を含む）があり、いずれも政治の複雑化、社会の分化に見合う権謀術数を必要悪として前提を認めた上で、客観的な正邪の判断を天子一人に帰し、専権の伸展を合理化している。

また諫官の発言権についていえば、唐、宋初の御史は政論に関与せず、諫官は天子を拘制して、宰相を攻撃することはなかったが、真宗、仁宗年代、権限が拡大して政策、人事、行政に干渉し、宰相との対立が深まり、専制君主の専権を助長して、原始儒教的王道理想には反する現実を将来した。

(七)第二次の挫折と再起

慶曆改革失敗後、歐陽修は政敵に無実の私通罪を中傷されて左遷された。この失意の中で、再び彼の学問探究は深まり、京官復起後、新唐書を編纂した。彼はその後、翰林学士、枢密副使を経て参知政事に昇り、政権の座を獲得した。

(八)歐陽修、韓琦、富弼の政権—嘉祐治平の治—

一〇六〇—六六年、歐陽修、韓琦、富弼の慶曆改革派は宰相の地位につくが、三者の政見は穩健実用に変じ、短期ではあるが、政治の安定がもたらされる。歐陽修は夷陵左遷時代から漸進改良主義、人才主義に転じていたが、宰相に就任してこれを実行に移し、行政能率の簡素化、人才登用に治績を挙げる、人才主義は後年の新旧両派の党争を招いたが、科挙改革は政論の隆盛を通じて新興勢力の抬頭に貢献した。

さて富弼、韓琦、歐陽修の合作が小康をもたらし、韓琦と富弼が衝突し、歐陽修は韓琦と合作して富弼に対抗する。仁宗没後、曹太后派と英宗が対立して生じた濮議の典礼論争では、非難は主唱者韓琦よりも歐陽修に集中し、洛学派系の南宋道学派の与えた異端の烙印は、清朝錢大昕、段玉裁の弁護を得るまで定型化され、彼の政治生命を奪った。それにしても濮議において諫官派が歐陽修攻撃に転じた皮肉は、彼自身の言論解放の予期せざる結果であつた。

(九)誣言と左遷、新法反対、隠退

濮議の政争で孤立した歐陽修は、第三次の中傷による左遷で挫折し、隠退を決意する。この間、王安石の新法が断行されるが、歐陽修はかえつて、行政画一の弊害を理由に保守を主張する。神宗は歐陽修の登用を王安石に諮るが、安石は歐陽修の周礼軽視、春秋正名の立場の故を以て反対する。当時の政治理論はこのように深刻に分化し、かつての知己も政策上はげしく対立した。かくて王安石の宰相就任後まもなく、歐陽修は隠退し、その翌年失意の晩年の幕を閉じるのである。

三

以上、私なりの主観、術語を混えつつ、劉教授の著述の内容を簡略に紹介した。論述はきわめて多岐にわたり、周到、網羅的である。歐陽修の活動の全面に対する、このような近代的評価は私の知る限りでは、史学方面では内藤虎次郎（新制東、史綱要）、内藤戊申（土瀨寿記念東洋史論叢）、経学方面では狩野直喜（中国哲、武内義雄）（宋学の由来及び其特殊性）、西順蔵（北宋その他の正統論、戸田豊

内義雄）（岩波講座東洋史論七）

（北宋の由来及び其特殊性）（一橋論叢三〇—一五）

三郎(歐陽修の易学)、文学では田中謙二(欧陽修の詞につ)等の先学の先駆的業績があるが、統一完結した著述としては、本書を以て嚆矢とする。その意味で本書の学問上の啓蒙的価値を先ず第一に挙げておかねばならない。

さて劉教授を含めたアメリカ東洋学の最近の傾向は、一九世紀ヨーロッパのシノロジの伝統をうけつぎ、同時に人文、社会科学の研究法を広く活用し、現代的視点に立つてアジアの全体像を再構成しようとしている。このような学問傾向の中で、劉教授の政治思想史的な近代的評価は、一体、在来の歐陽修研究に対し、いかなる新しい寄与を添加しようとするのであろうか。

まず史学的に見れば、基本史料たる四種の本伝「墨本神宗実録本伝」、「朱本重修実録本伝」、「神宗旧史本伝」、「四朝国史本伝」はもとより呉充撰「行状」蘇轍撰「祭文」、「墓誌銘」、韓琦撰「墓誌銘」、歐陽発等撰「事蹟」、胡柯撰「年譜」、楊希閔撰「年譜」、華季亨撰「增訂年譜」、「宋史」列伝、司馬光撰「涑水紀聞」や、「歐陽永叔集」、「国朝諸臣奏議」、「名臣言行録」、「宋文鑑」その他、同時代の正史、編年、紀事本末、政書、地志、文集、筆記にいたるまで、引用はきわめて丹念、周到であり、在米の困難な客観条件のもとで、ここまで良く蒐集整理した教授の精進に対しては敬服の外はない。しかし、史料の本原性に対する批判、来歴批判という点になると、若干羅列枚挙の嫌がないでもない。少くともそのような疑念に対する弁護の意味からも、冒頭に一章を設けて、史料系統の整理を果し、客観的根拠を明示する努力が為されて然るべきであった。しかも、

そのようにして厳密な批判がかりに成立した後においても、現存する史料の史料価値の質的低下は、推論にもおのずから一定の限界を附与するものであることを注意すべきである。

そこで当然、統整法の問題が登場する。日、中、欧文の既往の研究書の周到な整理をつみ重ねて構成された本書に、従来の研究の枠を超えた新しい視点を示唆するところがあるとするれば、それは恐らく、歐陽修のパーソナリティーを全構造的に把握し、しかもそれを社会関係の政治力学的対抗渦流の上に関連せしめようとする志向にあるといつて良いであろう。儒教的処世や修養の特異性は、冒頭に一言したように、政治、道徳、教養が未分化に一体化しているところであり、北宋盛期はこのような政治支配理念の新たな再編成が、社会分化を背景とする政治勢力の消長、交替と関連して生じた転換期であつた。本書が王安石新法の深刻な政治経済改革の先駆としての、慶暦の道義理想主義的改革を、歐陽修を軸として躍動的に描こうとするものであることは容易に理解できるところである。しかしそれにもかかわらず、本書全般に隔靴搔痒の感を禁じえないのは何故であろうか。思うに、理由の第一は恐らく研究全般の不備であろう。党争一つを取り上げてみても、社会の分化(諸儒職次「宋代の朋党問題」、官僚的土地所有の矛盾と地縁(周藤吉之「宋代官制」(学問との関係)「儒教の諸取題」、官制と土地所有)等の有力な仮説を生み出しながらも、全的な評価を下すに足る程の蓄積は今後に課せられている。理由の第二は恐らく視点の限界である。外国史として中国史に臨むわれ／＼にとつては、儒教的体制を、むしろ総体としての国家権威主義の支柱として理解することも可能である。こ

のような認識を欠く場合には、前近代中国の体制内での変革に対し、不当に現代的な評価を投影せしめる危険を免れないであろう。

以上を総合するに、本書は歐陽修研究の現学問水準を示し、しかも一歩を進めて、全面評価のための素材としての現存史料を網羅し、方法的には全構造的把握への志向を示唆した点に、研究史上、高い評価を受けるに値する労作である。今後の研究は恐らく本書を以て出発の拠点とするであろうことは当然である。しかしそれに先立って、史料面では基本史料(本伝、行状)の批判、統整法上では関連分野の研究の平均した充実による史料の再構成、説明仮説の発見、広い展望的視野に立つ時代性の理解の深化が推進されねばならぬ。円満篤実な人格を偲ばせる本書を読了して、教授の研究の今後の一層の発展を大いに期待する次第である。

(中華民國五十一年(一九六三年)五月刊 新華研究所發行二七四頁)

太平天国歴史博物館

太平天国史料叢編簡輯

河 鱈 源 治

太平天国に関する史料は、近年、史料の探訪がすすめられて、刊本、写本、草稿、文書などが、続々と発見されているが、それが出版紹介されているのは、ごく一部にとどまっている。近代史資料叢刊「太平天国」(全八冊、一九五二年刊)は、戦後の太平天国史の研

究の前進に大いに役立つたのであるが、その巻頭の編輯委員会の序言には、この書は、高中学の教師たちに歴史研究の参考として提供したもので、なお重要な資料は陸續として発見されており、収録し尽すことは出来ないで続編に収めることとし、すでに、続編は南京において編輯され、遠からず出版されるだろうと述べている。その後十年を経て、出版された本書は、続編という形式はとっていないが、実質的にはその役割を果しているといえよう。

本書は、前言によれば、一九五〇年の南京市における太平天国起義一〇〇年の記念事業として計画された(1)展覽会の開催、(2)天王府の遺蹟に建碑、(3)太平天国歴史博物館の建設、(4)太平天国文献と資料の編纂、の中(4)の事業として生れたものである。史料の編纂事業は、一九五一年八月から五六年十月までは、起義百年記念史料編纂委員会が担当し、その後は南京太平天国紀念館が継承し、一九六一年一月、紀念館が、太平天国歴史博物館と改められてから、そこが継続して責任を負っている。史料は(1)全国各地、(2)江蘇・浙江・安徽三省の探訪(3)南京図書館の頤和路、竜幡里の両書庫と前蘇南区文物保管委員会の書庫から集めるが、とくに(3)が主な来源となつた。頤和路書庫の蔵書は七十数万冊に達し、その中アヘン戦争後の史、子、集部、叢書、雜誌、函牘、檔案と一頁一頁調査して、太平天国関係の資料として、刻本、稿本、鈔本九二五種、方志七三〇種、計一六五五種、一五二七四冊を得た。この中、方志を除く九二五種を分類すると次のようである。